
夏の桜は赤い空蝉

柿原 凜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の桜は赤い空蝉

【ZPDF】

Z2291BA

【作者名】

柿原 凜

【あらすじ】

Twitterでお題を募集して書いた作品。

お題：

「空蝉」

「おかえり」

「野球帽」

「桜」

「制服」

「左手の小指だけにマーキュア」

夏に見る桜の木も、また違った美しさがある。そう教えてくれた彼がこの街を去つて早四ヶ月。その彼が今日、久しぶりに帰つくる。

去年のちょうど今頃、私に初めての彼氏ができた。制服の似あう凛とした青年かと思えば、野球帽がやけに似合つ少年のよう彼。彼と一緒にいると、不思議と微笑ましくつてフワフワした気持ちになつて、まるで桜吹雪になつて温かい空を舞うような、そんな気分になる。春の日の午後、久しぶりに野球部の練習が無いと知つて急いでお弁当を作つて一人でピクニッケに行つたつ。彼は野球部で毎日練習練習だつたし私も私で地元の国立大学を目指して勉強していたからデートなんてする時間がなかつた。お互いそんな感じだつたから、初デートがこんなに輝いたものだつて気付いてやけに幸せだつたような気がする。高校の裏山の小さな丘に立つがつしりした桜の木。そこが私たちの最初で最後のデートスポットだつた。

三者懇談の真つ最中だつたからかもしれないが、その日は生徒の数がまばらだつた。私はまさに三者懇談をしに来ていたからそんなに浮いた感じではなかつたのだが、彼はそうではなかつた。顧問の先生が担任を持っていることを知らず、練習があると勘違いして一人だけグラウンド整備していたのだ。私が駆け寄つてそつと教えてあげた時のあの青ざめた表情、今でもクスッと笑えてくる。私はその時、咄嗟の判断でこれからデートしようと提案してみた。今から考えてみるとそれはかなりウブな感じで、我ながらよく言えたなあというほど恥ずかしいものだつた。グラウンドの果てに蜃気楼ができているような暑さのど真ん中で赤面しながら話す、私と彼。親が後ろで待つていると気づいたときには汗が本当に吹き出してきて恥ずかしくなつた。日に焼けた彼の笑顔と大きな手の平に見送られて三者懇談に向かつたのは今でも鮮明に思い出せる。

比較的家も近かつたし、二人共その時は財布を持っていなかつたから、私が家で簡単に弁当を作つて持つていくことにした。彼はこの悔しさを素振りで解消するとか何とか言つてたし、お腹を空かして待つてくれていることだらう。それだけで胸の中の気泡がポコポコと出て来そになる。昨日の晩の残りと、簡単な冷凍食品。そしてパン。レイアウトを考えて可愛く見せるよつなそういう弁当ではないけれど、多分きっと満足してもらえるだらう。野球部員にも満足してもらえるだけの量はある。完成と同時にいくつもの弁当箱をカバンに詰めて、自転車の荷台に乗せて急いでペダルを漕いだ。蝉しぐれのトンネルを通りぬけ、汗を拭きながら坂を登る。坂を登つた先のグラウンドに彼が待つていてると思つたら、少々の疲れなんてどうでもよくなる。ただ、中の弁当は崩れてないかとか、汗だくのセーラー服で嫌われないかとか、そういうことばっかり気になつてしまつ。でも結局は、裏山の桜の木が見えただけで嬉しくなつてまた頑張れる。滑りこむように校門を通りぬけ、グラウンドの手前で自転車を止め、慌てて彼の元へと急ぐ。やつぱりまだ彼はバックネット裏で木製のバットを振り続けていた。

「おう」

彼はバットを肩に乗せ、別れ際のあの笑顔をもう一度見せてくれた。つられて私も微笑んだ。乱れた髪の毛を後ろで結い直しながら。

「ごめん、遅くなつちゃつた」

「いいよいよ。ちょうど腹減つたし。弁当待つててよかつたわ。あの桜の木の下で食べるんじやろ?」

「そうそう。いいかなあつて思つて」

さつき私は、裏山の桜の木の下で一緒にお弁当を食べませんかつて、告白するよつに誘つた。漫画かドラマの見すぎだつて言われるかと思つたら優しく笑つて許してくれたから、ついついこのベタつく暑さにも負けないくらい体じゅうが火照つていた。

「じゃ、行こつか」

ユニフォームに着替えず、夏服のまま素振りをしていた彼は、野

球帽をちゃんと頭の上に乗せて、重そうな野球カバンを肩にかけ、自転車を押す私の横をゆっくりと付いてきてくれた。身長で言つとちょうど私の目線に彼の顎がある。ちょうどだけ見上げれば彼と目が合う。この角度がたまらなく好きだった。弁当に配慮しつつ、彼の顔もチラチラとチャックしながら、桜の木を目指した。

小高い丘にそびえ立つ桜の木は、夏でも青々と茂つて堂々としている。大きく枝を広げておるおかげで日陰の部分が多く、心地よい。私と彼はほぼ同時に座り込み、私は弁当を開いた。見た目は美しくもなんとも無いけど、空腹な彼はためらいもなく右手にパンを左手に箸を持つてつまみはじめてくれた。彼が左利きだったのをはじめてそこで知つて、左側に座つたのをちょっとだけ後悔した。

たらふく食べた彼は、満足したと同時に眠つてしまつた。ちょうど乗せた野球帽が桜の花びらのようにひらひらと転がつて地面に落ちていつた。樹の幹を枕に寝ておるのに嫉妬しつつ弁当を片付ける。とはいえたゞも残さず平らげてくれたのがやけに嬉しくて、じりじりする暑さを忘れてしまつほどだ。時間が入道雲みたいにゆっくりと流れていく。

最後の弁当箱を片付けて袋を持ち上げた時、小さな瓶がどこからかポトリと落ちてきた。細長い赤い小瓶。間違いない、私のマニキュアだ。弁当袋の中に誤つて入つておいたのだろうか。場違いな感じが拭えない。その時私は思わずいたずら心が働いた。そつと彼に忍び寄る。そしてそつと、彼の左手の小指に刷毛を当て、すべらせた。彼の小指の爪が真っ赤に染まつていく。笑いをこらえきれずどうとうクスつとしてしまつてとき、彼が眠りから覚めてしまつた。

「くすぐつたいい」

彼は左手で目をこすりながら体を起こしておる。まだ乾ききつていなないマニキュアが彼の鼻の頭に付着し、またクスつとしてしまう。彼はまだ気付かないようで、「何?」を繰り返している。

「左手の小指、見てみ」

私がそつとささやいてみると、彼は恐る恐る自分の左手の小指ま

で目線を移した。そのあとは説明するまでもない。彼は何がなんだかわからなくて、ただただ薄く笑うばかりだった。

そんな彼は急に立ち上がって、樹の幹をじっとみつめはじめた。何かを探してゐるのだろうかと思つたが、私が声をかける前に、彼は私の目の前に何かを差し出してきた。茶色いその何かにピントを合わせようと私はちょっと頭を後ろに下げた。ピントがあつた途端、私は飛び上がるほどびっくりしてしまつた。蝉の抜け殻だつた。虫が特別嫌いで苦手つてわけではないけど、得意なわけがない。彼は先程のマニキュアのお返しとばかりに私の方に蝉の抜け殻を向け、近づけてきた。私は片目をつぶつて彼、いや蝉の抜け殻から逃げ回つた。眠りから覚めた彼はエネルギーが有り余つてゐる。さすが野球部の元気である。すぐに私は追いつかれて降参した。どちらからともなく笑い合つて、また樹の幹を背にぐたつと座り込んだ。

しばらくして、「そうだ、空蝉にマニキュア塗つてみよう」と言つたのは彼の方だつた。何を言い出すかと思つたが、マニキュアと蝉の抜け殻が手元にあるのは確かだし、彼となら何をしたつて樂しいのはわかつてゐる。私はポケットにしまつていたマニキュアの小瓶を取り出し、彼に渡した。渡したはいいが、不器用な彼は今にも蝉の抜け殻、いや空蝉を今にも潰してしまいそうだったので私が代わりに塗ることにした。

「まさか”空蝉”なんて言葉、知つてゐるとはねえ
「そのくらい俺でも知つてゐるよ」

クスッと笑つた私がその後、彼から進路の話を聞くとは夢にも思つていなかつた。地元の国立を目標していいた私は、大学に行つても彼とこうしていたいつて思つていたのに、彼は野球で推薦をもらつていて他県の大学に行つてしまつらしい。そう思つと、急にあと半年の高校生活が短く思えてきた。さつきまであんなにじかんがゆつくりと流れていたのに、急にそつでもなくなつてきて、辺りがだんだんざわめきだつてきたような気がする。「そろそろ帰ろつか」なんて彼が言つのもやけに寂しく思えて、今日だけはずつと袖をつま

み続けた。それから半年後、私たちは卒業し、彼とも離れ離れになってしまった。真っ赤になつた空蝉は、今でも大事に勉強机の奥に置いてある。真っ黒に日焼けした笑顔の写真と一緒に。

そんな彼が今日、この街に帰つてくる。今度は彼の方から一年ぶりにあの桜の木に行こうと誘つてくれた。私はやはりあの日と同じように、多めの弁当とマニキュアの小瓶と真っ赤な空蝉を持って駅で待つている。彼が乗つているはずの電車がプラットフォームに到着し、ひとつ大きく息を吐いた。そして彼が改札口からゆつくりと歩いてきた。大学の野球部のものと思われる真新しい野球帽を頭にちょこんと乗せて日焼けした顔で笑いかけてくる。左手の小指だけ真つ赤に塗つて見せてくる彼。マジックで塗つたのだろうか。私も負けじとあの日の真っ赤な空蝉を彼に差し向ける。私はクスッと笑つて、彼もいつものように笑つてみせた。

「おかえり」

「ただいま」

彼が野球帽を私の頭にかぶせてきた。私も彼の頭の上に、赤い空蝉をちょこんと乗せた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2291ba/>

夏の桜は赤い空蝉

2012年1月5日20時48分発行